HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	今，そしてこれから何が求められるか : COVID-19 対策に関する科学技術コミュニケーションの経験から
Author(s)	西浦, 博
Citation	科学技術コミュニケーション, 29, 101-105
Issue Date	2021-08
DOI	10.14943/99340
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/82474
Type	bulletin (article)
File Information	JJSC29_101-105_NishiuraH.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

小特集ノート：寄稿

今，そしてこれから何が求められるか
～COVID-19 対策に関する科学技術コミュニケーションの経験から～

西浦 博[1]

Clear and Present Needs:
The Suggestion from Experience of Science Communication for COVID-19

NISHIURA Hiroshi[1]

要旨

筆者は理論疫学の専門家として，新型コロナウイルス感染症対策専門家会議の傘下であるクラスター対策班で，新型コロナウイルス感染症の分析および対策に関する提言を 2020 年 2 月から 7 月まで行った．会見発表だけではなく，Twitter での発信も行うなかで，コミュニケーションの専門家の支援も受けた．現在の日本では，科学と政治の関係性が幼弱であり，専門家による政治への踏み越えや，政治による専門家への責任転嫁など課題が多い．このような状況を経た今，科学技術コミュニケーターが果たす役割は非常に大きなものになると思われる．科学技術コミュニケーターには，科学が発すべきメッセージの中枢のデザインにまで大きく影響を与えるような専門家になっていただきたいと希望する．

キーワード：新型コロナウイルス感染症，科学と政治，クライシスコミュニケーション，リスクコミュニケーション，科学技術コミュニケーター

Keywords: COVID-19, science & policy, crisis communication, risk communication, science communicator

1. 挨拶

皆さんこんにちは京都大学の西浦です．この度は CoSTEP の修了，誠におめでとうございます[1)]．私は今回の新型コロナウイルス感染症の流行で，北海道大学から研究室の皆で荷物を持って霞ヶ関に行って，科学コミュニケーションに一定の度合いで関わりました．私からは皆さんの修了のお祝いの言葉に変えて，その話と教訓，それから皆さんに期待する事を少しだけお話させていただきます．

図 1　ビデオメッセージ中の著者（2021 年 1 月 28 日録画・同 3 月 13 日配信）

2021年 6 月25日受納　2021年 6 月28日受理
所　属：1. 京都大学大学院医学研究科
連絡先：nishiura.hiroshi.5r@kyoto-u.ac.jp

2. 感染症の専門家として

今回の流行で日本でも画期的なことがありました，この写真は厚生労働省のビルの中，11 階の写真です（図２）．北大のメンバーが中心となって，モデリングのエキスパートの人たちで部屋をもらって，厚生労働省新型コロナウイルス感染症対策本部の中に専門家が入り込みました．クラスター対策班[2] というのを組織して頂いて，流行データをリアルタイムでかき集めて，分析してはそれを発表して，政策のフィードバックをするようなことをやってきました[3]．

図２　厚生労働省の一角に設けられたクラスター対策班の部屋．筆者は右奥

その中で，みなさんの生活にも大きな影響を与えざるをえないことや，ハイリスクな接触を避けること，あるいは「緊急事態宣言下ではこういう社会になるのでこういう呼びかけをしている」ということを伝えないといけないことがありました．Twitter[4] に僕らが動画をあげて，それがテレビに出たということもありました（日本テレビ 2020）．皆さんに「８割の接触削減はどういうものなのか」とか，あるいは「クラスター対策というのは何をしているのか」ということをお話しする機会がありましたが，これは分析のマニアである私たちが国民に向かって直接に科学的な見解を報告する機会であったと同時に，とても危険なこともはらんでいて，たくさん苦労したことがありました．

第１波以降も含めて私自身は，「どうして８割接触削減かというと，感染者がすぐに落ちて１ヶ月で感染拡大が押さえられるからですよ」というような話をしました（前村 2020）．あるいは「もし何も対策しなければこの感染症でこれくらいの人が死亡するリスクがある，重症化するリスクがある」ということを発表しました（時事通信 2020）．これに対しては「研究者が単独で言うべきものではないんじゃないか」という社会的な批判も受けました．新型コロナは，予防接種が出回るまでは経済的インパクトが大きい接触削減といった流行対策が必要とされる感染症でした．その中で，研究者として体を張って流行の制御に取り組まないといけないことが沢山ありました．

3. コミュニケーションの専門家とともに

でもその中でコミュニケーションに妥協しないということは，とても重要な役割を果たしました．専門家会議の会見では，座長である脇田隆字先生や副座長の尾身茂先生，いつもその二人の大先輩の横に座らせて頂いて，科学的に正しい情報，精密な事実を専門家として発表しました（石阪 2020）．特に私はデータ分析をする役割でしたから，私がいないとうまく伝わらないリスク評価結果だったり，未来の見通しを伝える事を，とにかく真摯な態度で粛々とやりなさい，ということを，コミュニケーターの専門家の方[5] にもアドバイスをいただいていました．政府のあのビル，クラスター対策班の中あるいは専門家会議の中にコミュニケーターの専門家の方に入っていただいて，勇気をもって今の見通しや今のリスク評価の結果をお伝えすることがあったのです．見えないところであるんですけれど，いつも僕の横には科学コミュニケーションのプロの人たちがいてくれました．

そのアドバイスを受けて，2011 年の原発の時よりも混乱しないようにみんなで努力しようということを約束しました．政府の専門家の公式の会議は少なくとも２時間ほどで終わるので，その前までに半日以上，８時間のミーティングを２回，土曜と日曜の夜中にやってコンセンサスを形成して，

ワンボイス[6] で混乱を招かないようにという努力をしました．また，専門外の事項，例えば経済学の話や，自分たちが触れるべきでないことには触れないと一定のルールを持ってなんとか混乱を免れました．

4. 科学と政治の幼弱な関係

ただやはり社会的な影響が大きい流行でした．その中で，今でもそうですが，科学と政治の関係，距離感に頭を悩ませながらも，皆さんの命に関わる事なので，自分が勇気を持たなければならない所は自分がしっかりと正しい技術を公開していくんだ，という気構えで，北大の時も京都大学の時もやってきました．

そんな中で，緊急事態宣言や，いわゆる隔離という対策をしていくわけですが，接触者を追跡する場合と違って，経済的インパクトがどうしても甚大になるんですね．でも日本の政治で科学の取り扱いはどうしてもまだ幼弱です．それは発展途上なんだと思っています．だから責任の所在が専門家に行きがちで，「専門家が言うから特定の政策を実施してるんです」といつも言われてしまうんですね．その責任を仮に一時的に全部背負ってでも，もうこれは歴史が検証するんだから必死にやろう，とみんなで声を合わせて，これまで流行対策に取り組んできました．

やはり理想的には主席科学顧問[7] が必要で，その顧問を取り囲むコミュニケーター達が重要な役割を担うんだろうと思います．でもそれがない中，幼弱な政治の中で，踏み越え，自分たちの領分を越えてしまう部分は，どうしても第１波の時を中心に今でもあります．科学的事実だからこれを推進しないと人の命に関わるっていう時は，医療者としてどうしてもこっちの方が絶対正しいという話をしないといけなかったことは，数え切れないほどあります．でも，だから役割分担が不明瞭になってしまういうことになる．

私が第１波の時に中心的に取り組んできた事は，どちらかというと，事実を伝えて今のクライシスの現状を共有するクライシスコミュニケーションの範囲に近いですね．それが少しずつリスクコミュニケーションに変わっていくフェイズに来ています．そんな中で，コミュニケーターが果たす役割が大変大きくなっているのは皆さんも肌身に感じてこられた通りです．

5. 科学技術コミュニケーターへの期待

このような人の生活に大きな影響を与える感染症の流行があったわけですから，それを踏まえて，霞ヶ関はもちろん，社会の中で，科学と科学の社会貢献の交差点はものすごい数があるので，そこで科学技術コミュニケーターが果たす役割は今後，大変大きなものになると思っています．CoSTEP はとても稀なコースだと伺っています．CoSTEP の科学技術コミュニケーションのコースを修了された皆さんが羽ばたいて行って，国全体でもローカルでもいいんです，重要な決定に関わるようなコミュニケーションの元々の設計のところから関わっていただきたいと思っています．つまりただ単に，記者会見の発表の問題だけではなくて，科学が発すべきメッセージの中枢のデザインにまで大きく影響を与えるような専門家になっていただきたいと，その飛躍を私は心から願っています．本日は大変おめでとうございます．ご清聴ありがとうございました．

注

1）　本稿は 2021 年 3 月 13 日に開催された 2020 年度 CoSTEP 修了式特別プログラムの記念講演「ポストコ

ロナの科学技術コミュニケーション」の冒頭によせたビデオメッセージの講演録である．記念講演の詳細については川本（2021）を参照.

2）新型コロナウイルス感染症対策専門家会議は，COVID-19 の対策について医学的な見地から助言を行う組織として，２月 14 日に新型コロナウイルス感染症対策本部によって設置が決定された組織．座長は脇田隆字（国立感染症研究所所長），副座長は尾身茂（地域医療機能推進機構理事長）で，他 10 名から構成された．庶務は厚生労働省が主となり内閣官房が担った（新型コロナウイルス感染症対策本部 2020）．クラスター対策班は, 対策本部のもと自治体と連携してクラスター発生の早期探知, 専門家チームの派遣，データの収集分析と対応策の検討などを行うために，２月 25 日に厚生労働省によって設置が決定された組織（厚生労働省 2020）．専門家会議は７月３日に廃止され，その機能は新型コロナウイルス感染症対策分科会に引き継がれた.

3）著者がクラスター対策班に参加した経緯や，その後の対策の内側の詳細については川本（2020），西浦他（2020）などを参照.

4）Twitter アカウント「新型コロナクラスター対策専門家 @ClusterJapan」．2020 年４月３日に開設され，クラスター対策班のメンバーなどが，テキストや動画での用語解説などを行った.

5）専門家会議には公衆衛生・医療社会学を専門とする武藤香織（東京大学）が入り，専門家会議の前身であるアドバイザリーボードメンバーであり，科学ジャーナリズム・科学コミュニケーションを専門とする田中幹人（早稲田大学）も支援した．Twitter「新型コロナクラスター対策専門家」では，リスクコミュニケーションなどを専門とする堀口逸子（東京理科大学）がアドバイスを行った．詳しくは西浦他（2020）.

6）ワンボイスとは，ひとつの組織から一貫したメッセージを伝えることを指す．シングルボイスとも呼ばれる．矛盾したり，組織内の不一致があるようなメッセージを発しないことが重要であり，一人がメッセージを発することを指していない．（吉川 他 2009）．また，対象によっては異なるメッセージを出すことの重要性も指摘されている（Clark *et al.*, 2006）.

7）英国では政府主席科学顧問（GCSA: Government Chief Scientific Adviser）が常時設置されており，首相や内閣等に科学的助言を直接提供するとともに，関係する大臣等と協働する．政治任用ではなく公務員扱い．また，緊急事態においては GCSA を座長として緊急時科学的助言グループ（SAGE: Scientific Advisory Group for Emergencies）が設置される（榎 2015）.

文献

Clarke, L., Chess, C., Holmes, R., O'Neill, K. M. 2006: "Speaking with One Voice: Risk Communication Lessons from the US Anthrax Attacks", *Journal of contingencies and crisis management*. 14(3), 160-169.

榎孝浩 2015:「行政府における科学的助言　英国と米国の科学技術顧問」『レファレンス』2015 年 12 月, https://dl.ndl.go.jp/view/download/digidepo_9578221_po_077906.pdf?contentNo=1（2021 年 6 月 13 日 閲覧）.

石阪友貴 2020:「コロナ対策の「自粛継続」に専門家たちの葛藤　感染者が爆発的に増えるリスクは消えていない」『東洋経済 ONLINE』2020 年 3 月 25 日, https://toyokeizai.net/articles/-/339842（2021 年 1 月 28 日 閲覧）.

時事通信 2020:「東京で感染の伸び鈍化か＝大型連休前に緩み懸念も―北大教授」『nippon.com』, https://www.nippon.com/ja/news/yjj2020042401179/（2021 年 1 月 28 日 閲覧）.

川本思心 2020:「新型コロナ対策, 研究と政策現場での 6 ヶ月～西浦博教授ロングインタビュー～」『いいね！ Hokudai』2020 年 7 月 31 日, https://costep.open-ed.hokudai.ac.jp/like_hokudai/article/11332（2021 年 6 月 13 日 閲覧）.

川本思心 2021:「小特集 2 序文: ポストコロナの科学技術コミュニケーション」『科学技術コミュニケーション』29, x-x.

厚生労働省 2020:「新型コロナウイルス　クラスター対策班の設置について」令和 2 年 2 月 25 日, https://www.mhlw.go.jp/stf/newpage_09743.html（2021 年 6 月 13 日 閲覧）.

前村聡 2020:「「接触 7 割減」では収束まで長期化　北大教授が警鐘」『日本経済新聞』2020 年 4 月 11 日, https:

//www.nikkei.com/article/DGXMZO57961860R10C20A4CZ8000（2021 年 1 月 28 日 閲覧）.
日本テレビ 2020:「政府の専門家会議のメンバー　ツイッター開設し情報発信」『日テレ News24』2020 年 4 月 4 日, https://www.news24.jp/article/2020/04/04/07619935.html（2021 年 1 月 28 日 閲覧）.
西浦博・川端裕人 2020:『理論疫学者・西浦博の挑戦　新型コロナからいのちを守れ！』中央公論新社.
新型コロナウイルス感染症対策本部 2020:「新型コロナウイルス感染症対策専門家会議の開催について」令和 2 年 2 月 14 日, https://www.kantei.go.jp/jp/singi/novel_coronavirus/senmonkakaigi/konkyo.pdf（2021 年 6 月 13 日 閲覧）.
吉川肇子・釘原直樹・岡本真一郎 2009:「危機時における情報発信の在り方を考える　新型インフルエンザのクライシスコミュニケーションからの教訓」『医学界新聞』2009 年 11 月 2 日, https://www.igaku-shoin.co.jp/paper/archive/y2009/PA02853_04（2021 年 6 月 13 日 閲覧）.